

三月の法座・行事

十日・同朋の会例会（座談会）

大阪教区第七組

長教寺住職

稲垣

洋信 師

教應寺住職

建部

智宏 師

（午後二時）

十一日・東日本大震災犠牲者追悼会

（午前八時）

十二日・闍如上人御逮夜・常永代経

（午後一時半）

十三日・闍如上人御命日（午前八時）

二十四日・正信偈書写の会（午前十時）

・春季彼岸会並総永代経法要

兼墓地納骨（物故者）追弔法要

講題 「人は何故『南無阿弥陀仏』で救われるのか」

大阪教区第十三組

心願寺住職

松井

聰 師

（午後一時半）

二十五日・蓮如上人御祥月御命日

二十七日・宗祖聖人御逮夜（午後二時）

二十八日・宗祖聖人御日（午前八時）

◆敬弔

生前の遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

法名 専念院釋中道

俗名 田中 久也

一月六日寂 享年四十八歳



今月の天満別院伝道掲示板

ご法事とは

その人を

思い起こすという事

語り継ぐという事

忘れないと誓うという事

酒井義一

編集後記

昭和38年8月の第1号に始まり、今号の第652号までに及ぶ長きにわたり、ご愛顧いただきました「六字城」につきまして、来る4月号よりこれまで以上に読みやすい紙面作りを考え、紙面の刷新を致すことにしました。皆様方におかれましては、天満別院「六字城」に寄せるご意見等を賜りますれば、幸甚に存じます。今後とも天満別院「六字城」のご愛読をよろしくお願いいたします。

H

六字城

発行

真宗大谷派

（東本願寺）天満別院

大阪市北区東天満一―八―二六

電話 六三五―一三五三五

代表者

輪

番

武宮

信勝

「和讃のおはなし」

真宗大谷派

鍵役

宣心院

大谷

暢文

『勢至讃（八）』

念仏のひとを摂取して

浄土に帰せしむるなり

大勢至菩薩の

大恩ふかく報ずべし

（念仏を称える人をお迎えして下さり、お浄土に向かわせる菩薩が大勢至菩薩なのです。ですから大勢至菩薩の大きなご恩に深く感謝するべきです。）

この一首が『勢至讃』の最後であり、また『浄土和讃』最後のご和讃にもなります。今私たちがお念仏を称えることによってお浄土に生まれることができるの

は、これまで見てきたような勢至菩薩のおかげでありますから、その広大なご恩徳に報いようということです。この一首は、後に書かれている「いじよう 已上 大勢至菩薩 源空聖人御本地也」と合わせて見なければなりません。この箇所がないと、親鸞聖人が『首楞嚴經』をもとに『勢至讃』をご制作なさった意図がつかめないからです。

親鸞聖人の師である源空聖人は「智慧第一の法然坊」といわれました。阿弥陀さまの脇侍・慈悲の観音菩薩に対して、智慧の勢至菩薩があります。大まかに言うと、源空聖人は大勢至菩薩が本地、つまり源空聖人は勢至菩薩の生まれ変わりと言うことができます。このような表現は現代では非科学的に思えるでしょうが、このような表現が最適であることを見ていきましよう。

『首楞嚴經』では、勢至菩薩が浄土の悟りとして無生法忍に入ったことを説いています。無生法忍については、いろいろな解釈がありますが、親鸞聖人の『正信偈』の「與韋提等獲三忍（韋提と等し

く三忍を獲）」から解釈すると、お名号を信じていただいたときに得る利益が無生法忍です。それをさらに進めて考えていきますと、親鸞聖人は念仏者が信心をいただくところに浄土のお悟りが開けることが決定する不退転の位に入ると見ていかれました。つまり、勢至菩薩が無生法忍ということを明らかにしてくださったおかげで、私たちがお念仏を称えてお浄土に生まれることが明らかになったのですから、そのご恩に報い感謝しなければならぬと詠っているのです。

そして、親鸞聖人にとって、この勢至菩薩は他でもない師である源空聖人であつたのです。もちろんこのような教えの流れは、決して源空聖人お一人によるものではなく、阿弥陀さまから勢至菩薩への直接のご教化から始まり、龍樹菩薩から源空聖人に至るまでの七高僧方の伝持があつて初めて親鸞聖人のもとに受け継がれたのです。さらにその教えをいただいているのが、現代の私たちなのです。

霊園・墓石



禁社 太田石材店

本社 〒536-0001

大阪市城東区古市1丁目23番20号

本店 〒530-0042

大阪市北区天満橋1丁目2番18

TEL 06-6930-5075

0120-30-5075

FAX 06-6930-5078

◆真宗本廟 春の法要のご案内

真宗本廟（本山）では左記の日程の通り、春の法要が執り行われます。皆様お誘い合わせの上、是非ご参拝ください。

四月一日（月）

師徳奉讃法要

（午前十時）

親鸞聖人御誕生会 （音楽法要）

記念講演 「人間に生まるる事」

御講師 真宗大谷派教学研究所長

楠 信生 師

（午後一時二十分）

四月二日（火）

全戦没者追弔法会

（午前十時）

記念講演

「ヒロシマ被爆者として生きつづけて」

御講師 元大阪市原爆被害者の会

事務局長・語り部

高木 静子 師

（午前十一時半）

四月三日（水）

相統講員物故者追弔会兼

帰敬式受式物故者追弔会（午前十一時）

四月四日（木）

法然上人八百回御忌法要日中（午前十時）



登高座作法講習会 考查の様子

◆登高座作法講習会

去る2月15日から2月21日にかけて、大阪教区教化委員会「儀式・法要部」において、経導師及び式導師として必要な読法・作法について習得することを目的として、登高座作法講習会が天満別院を会所に開催されました。伝授師には信悟院殿 大谷 浩之師、教授師には清澤 悟師、講師補助には大阪教区准堂衆会の方々にお越しいただき、別院職員4名を含め、計25名が受講し、無事に合格することができました。

◆春季彼岸会並総永代経法要

兼墓地納骨（物故者）追弔法要のご案内

天満別院では左記の日程で春季彼岸会並総永代経法要兼墓地納骨（物故者）追弔法要をお勤めいたします。

尚、法要の後、法話があります。どうぞ皆様ご参拝くださいますようご案内申し上げます。

日時

3月24日（日）
午後1時30分より勤行

場所

天満別院本堂

講題

「人は何故『南無阿弥陀仏』で救われるのか」

御講師

大阪教区第十三組
心願寺住職

松井 聰 師

天満別院
春季彼岸会並総永代経法要

人は何故
“南無阿弥陀仏”で救われるのか？

お彼岸に念誦集の法話を聞いてみましょう！

法話 松井 聰 大阪教区第13組心願寺生職

2019 3/24(日) 午後1:30から

午後1時半より勤行があります、その後法話です
どなたでもご自由にお参りください

真宗大谷派 天満別院
〒530-0044
大阪市北区東天満1-4-26
☎06-6351-3535

JR 東富線「大阪天満宮駅」下車、2番出口より徒歩約3分。または、地下鉄谷町線・堺筋線「南森町」下車、南の2番出口より徒歩約3分。または、地下鉄谷町線・東富線「天満駅」下車2番出口より徒歩約10分。

天満別院ホームページ <http://www.tenma-betsuin.jp/>

◆みんなで一緒に唱いましょう

天満別院では2019年度からの新たな取り組みとして、「仏教讃歌を皆さんと共に歌いましょう」という願いを込めて合唱団『みのり』を立ち上げました。人と人とがふれあう交流の場としても楽しんでいただけたらと思います。老若男女問わず誰でもご参加いただけます。お待ちしております。

開催日 4月20日（土）



時間

午後2時～午後4時
（毎月第3土曜日）

場所

天満別院

指導

大阪教区第13組
超願寺住職
村上 奈津子 先生

参加費

無料

※尚、今月号の「六字城」に合唱団「みのり」のご案内を同封しております。参加ご希望の方は、FAXまたはお電話にてお申し込みください。

輪番雑感

「深い悲しみ」が縁となって

輪番

武宮 信勝

2011年3月11日の東日本大震災から八年が経ちます。以後も日本列島各地で発生する自然災害により今もなお、多くの方が悲しみや痛みを抱えて生活をしています。

私は震災の6ヶ月後に仲間と、大津波によって跡形もなくなった岩手県陸前高田市にある「本稱寺」にお見舞いに行きました。そこで目の当たりにした風景に唖然とした気持ちを今でも忘れることはありません。寺族の方も犠牲になられ、ただ々沈黙の中に合掌していました。

ご本山が中心となつての全国からの復興支援が実り、「本稱寺」は数年後、同地に見事な本堂が再建されました。土砂の中に埋もれていた梵鐘を立ち上げ「勿忘の鐘」として、毎年3月11日の午後2時46分に追弔法要が勤められています。

もう一つ忘れられないことは、仙台教区内のあるご住職さんが「私達が今本堂に一番大切なことは、義援金・物資でもなく、炊き出しボランティアでもない。この被災の事実に向かいにける生きぬく力。今こそ阿弥陀仏の本

願力に遇わさせていただくことではないか」と語られたことです。非常、いや無常の事態なればこそ、金剛堅固の信心こそが大切なこととして、我々に訴えられたのでありましょう。その為には一日も早く、被災した本堂の再興とご門徒のお内仏（仏壇）の安置であります。手が合わされ、仏法が説かれ、聴聞できる「場」が求められているのです。

人はこれ以上生きることのできないような深い悲しみの中にあった時、そのことが逆縁となり、命あることの有難さ、尊さをしみじみと感ずるのであります。そして同時に「ガンバツテネ」という励ましをとおして人の優しさ、温もりを感受するのであります。

又、福島県相馬市にいる友人が「御本尊に手を合わせる、それだけで心の支えになる。震災をとおして、改めてお寺とは、宗教とは何かが問われました。あらゆる視点からお寺の可能性をさぐりながら、お寺という場でご門徒の方々と共に歩んでいきます。」と伝えてくれました。

私は「天満別院においても今以上に、ご門徒の方々、地域住民の方々にとつて心の支えとなれるような歩を共にいたしましょう」と願わずにおられない。